

朝日新聞、2011年1月3日朝刊2面 「ひと」、この記事は以下のように進みます。

### 「バングラデッシュで高校生の教育支援をする

税所篤快さん（21）

●ヒントは自らの受験時代。衛星放送で授業をする予備校に通った。講師がいない教室でテレビの授業を見て勉強し、現役で早稲田に合格した。高校で最下位に近い成績だったのに。この体験をバングラデッシュに広げようと考えた。

●昨年6月から始めた教育支援。首都ダッカから船で川を2、3時間下った貧しい村の子に録画した塾講師の授業を見せ、現地の大学生が質問に答える。秋には1期生25人のうち4人が最難関のダッカ大学などに合格。村人は「奇跡だ」と驚いた。

●3年前、貧困向けの無担保融資で知られるバングラデッシュの「グラミン（農村）銀行」を本で知った。すぐに現地に飛び、事前の約束をとらず創設者でノーベル平和賞受賞者のムハマド・ユヌスさんと会った。

●行動力を買われ、同行初の日本人コーディネーターに。裕福な子が塾通いで受験に備える一方、貧しい子はあきらめてしまう現実を知り、支援策を練った。ユヌスさんに直接談判したら、「やってみなさい」。

●昨夏まで2年間、休学した。農村を訪れると、真っ暗な小屋で灯油ランプを頼りに子どもたちが勉強していた。彼らから学ぶことは多い。呆れ顔だった両親も最近は理解を示してくれる。

●春以来、全土に教室を広げるつもりだ。「世界はおもしろい。休学して外へ出よう」。内向き傾向が指摘される同世代にそう呼びかけたい。この新年もバングラデッシュで迎えた。」